

PHD LETTER

35

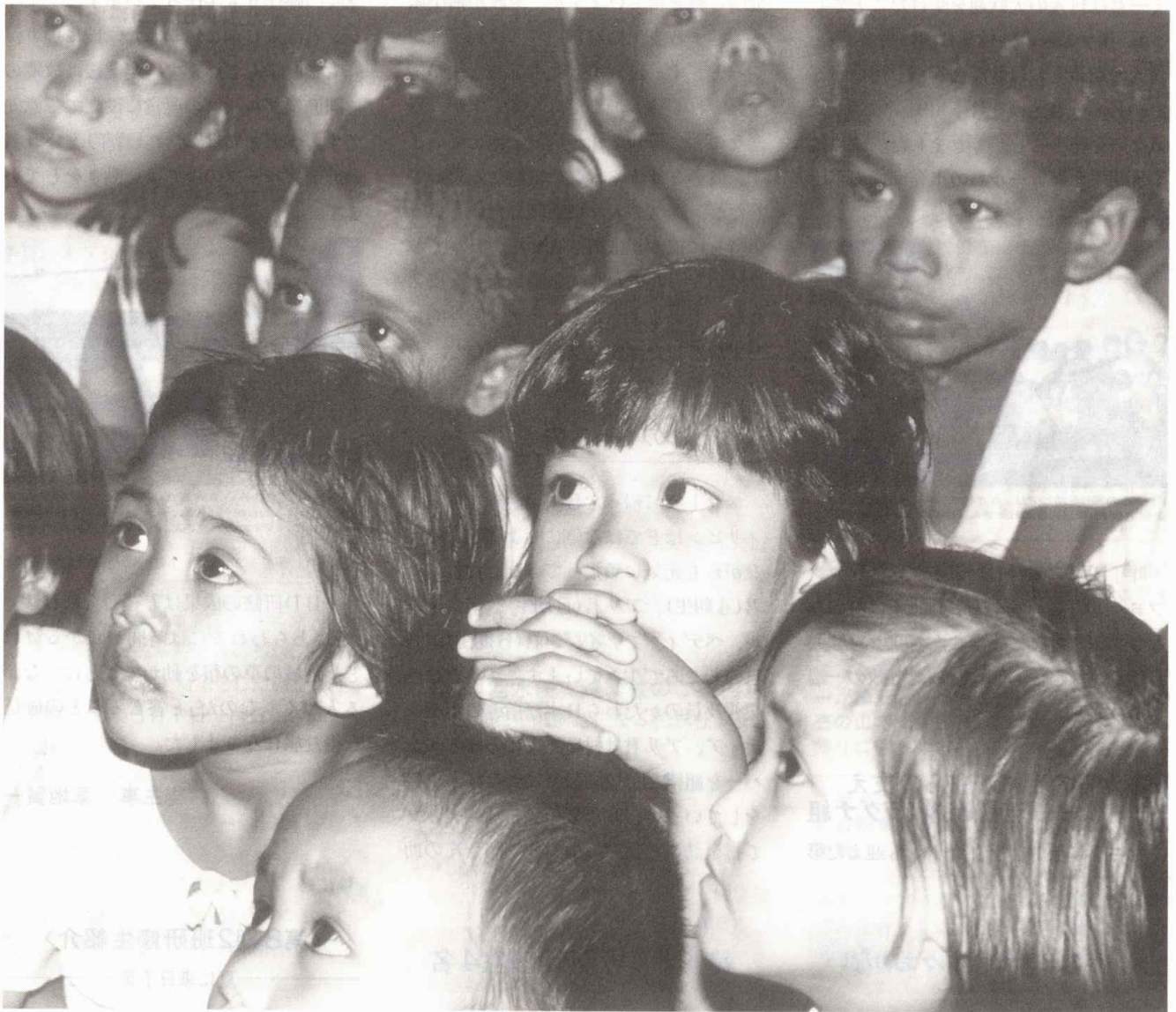
PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

1990・6

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からじまりました。

発行:財団法人PHD協会
編集人:草地賢一
住所:〒650神戸市中央区元町通5-4-3 元町アーバンライフ202
TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867
郵便振替:神戸1-29688 財団法人ピー・エイチ・ディー協会
定価:100円

- 私はPHDとこんなつきあいをしています..... 3P
- フィリピンレポート..... 4~5P



マニラ・モンテルパのスラムで

予防注射を受けよう
 恐ろしい病気にかからぬように
 テレビの語りかけこうなづく子供達
 満天の星空の輝やきにおとらぬ子供の瞳
 これをくもらすのは想像を超えた貧困



草の根の人々を訪ねて Report from Asia and South Pacific

3月24日から4月13日までフィリピン、インドネシアをまわりました。フィリピンはスタディツアーを兼ね5人が同行、インドネシアへは神戸新聞シンガポール支局記者が同行し取材をうけました。4月にネグロス、オリンガオ村に帰ったドミー君は村人の大歓迎を受けたことでしよう。我々は彼の帰村5日前に村を訪ね、村人の期待とお母さんの喜びを想いました。ドミー君とは4月下旬国際電話で元気な声を聞くことができました。彼に続く8期生ネストール君の発案準備の手伝いに一生懸命のようでした。



ドミー君の帰りを待つオリンガオ村の人々。左端がお母さん、後列右端が弟、3人目がお父さん。部落のチャペルの前で。

昨年10月に来神した東ネグロス、マンフヨッド町長バルダード弁護士は町のみならず州政府までまきこんで我々を歓迎してくれ、町民の側にたった町政の一端にふれました。

日本からの手紙が彼らの支え
苦闘が続くラグナ組
マニラに戻り、ラグナ州から迎えた第

今年にはビザが仲々おこない

いつもの年ならとくに来日している新研修生の来日が遅れに遅れ、6月になってしまいました。例年、前年秋に申請準備にかかり、今回も同様の手続きを踏んだのですが、6月1日施行の改訂入管法の影響で役所が多忙なこと、施行前に来日したいと申請が殺到したこと、「研修」資格で就労してしまう人の増加から審査が厳しくなったこと等のあおりを受けたようです。経済大国に住む一人として海外からの労働者の流入について考えさせられる今年の状況です。

フィリピン、インドネシアへ帰った研修生は今、

2期生ウィリー君に会いました。残念ながら1期生マノリト君、パニサレス君、2期生レネ君とは会えませんでした。ウィリー君によると政治の混乱からくる経済の悪化は草の根を直撃し、全員大苦闘のようです。彼も同じで、彼は農業研究所に職を得ていますが、家族が最小限必要とする支出に対し、収入は約7割がやっつです。足らずは食事を減らすか借金。これで病人がでたら大変ですが、残念なことに母親と妹が病気を抱えています。彼をとりまく状況に暗然たる思いでしたが、地域の人々に貢献したいという気持ちに揺るぎはありません。日本でお世話になった方からの激励が大きな支えになっているようです。今回は例外的にわずかでしたが緊急支援をしました。

それぞれのペースの スマトラ5人組

スマトラに帰った5人の漁師たちはフィリピンほどではないにせよ問題を抱えながらも元気に頑張っていました。ユリ君(4期生)、アリ君(5期生)、アフナル、ペディ、ファイジン君(6期生)は各自のところで生きています。ユリ君は漁業普及員のかたわら日本語指導のボランティア、アリ君は村に25人にのぼるメンバーを組織して協同組合につなげる準備をしています。昨年夏のフォローアップで村を訪ねた伊豆の山本佐一郎さんの助

言を得て、もう一名サムスアリスさんを研修生として招くことになり、アリ君は本当に嬉しそうで、グループを育てていく決意を語ってくれました。

アフナル君は帰国後も勉強しつづけて、漁の合間に、州都パダンにある日本文化学院の礎作りも手伝っています。ファイジン君は来日前に休学した学校に戻り、経営学を学んでいます。卒業後は故郷の協同漁業グループの運営に役立てる意向です。ペディ君は「ゲマ」(青年)という名の漁業グループの中でよい働きをしています。



ペディ君の属する若い漁業者グループ「ゲマ」のオフィスの前で。右から3人目がペディ君、一人おいてアフナル君、一人おいてペディ君のお兄さん。西スマトラ・アイルバンギス村で。

PHD研修の成果はと尋ねられれば、「外にあらわれるには時間がかかるけれど、地域の草の根を動かすことにつながる人づくりなのだ」と答えることの確信を得た旅になりました。

総主事 草地賢一

<第8期2班研修生紹介>

夏に来日予定



Mr. Samusaris
サムスアリス
男性 36才 漁業
インドネシア、西スマ
トラ州バシルパルー村
研修内容：沿岸漁業、
水産加工

しっかりものの奥さんと11才を頭に6人の子供がいます。5期生アリ・ムルティム君の帰国後、結成された漁師グループ25人を率いるリーダー。小柄ですが、大きな人望を得ていて、最貧の草の根にあってその克服をめざしています。



無口がしゃべりに一
恐ろしいPHD効果
兵庫県加古川市
丸山悦司さん 陽子さん

2期生ラダさん(ネパール)との出会いが、志方町という地域で、PHDを広める大きな役割を担う丸山悦司さんをかえてしまったようです。かつては無口な職人さん(表具屋さん)だったそうですが、今や仕事先でPHDの話をしだすと止まらない、夜遅くまで帰ってこないこともしばしばと奥さん陽子さん。

毎年ほとんどの研修生が本格的な研修に入る前、日本の家庭に慣れることを目的にお世話になっています。奥さんとおばあちゃんが田畑の仕事をされるので、そのお手伝いが研修生にとって、日本の農業にふれる第一歩。はじめは周囲からも奇異な眼でみられていたようですが、今では、ご近所からも滞り受け希望が集まり、丸山さん宅には研修生があたらぬこともできてきました。

ご夫婦で帰った研修生の村を訪ねること3度(フィリピン、インドネシア、スリランカ)、次はネパールかタイでしょうか。PHDのスタディツアーにこの地域から多くの小、中学生が参加するのも、丸山さんに対する信頼があるからこそ。「わしは播州弁しか言葉はでけへんでえ、フスマ張りやったらいつでも教えたるでえ」と元氣なお父さんです。

私はPHDとこんなおつきあいをしています。

この6月で10年目に入ったPHD、岩村ドクターのメッセージが、全国各地に広がり、それぞれのPHDとして根づいてきました。今年の研修生を含めて39人のアジア、南太平洋地域の草の根の人々を迎え、各地で研修、交流を行ってきました。まだまだ何うことのできない地域も多く、全国が

らお支えいただいているながら申し訳なく思っていますが、今後のご支援により地域を広めていきたいと思っています。今回はこれまでかかわっていただいたおよそ8000人の方々の中から、6人の方々のPHDとのつきあい方をご紹介します。



日常の社会問題への意識
とからめたPHD

広島県上下町
ドミー君と一緒の福崎裕夫さん(左)桑本昌和さん(右)

広島にはいくつかのPHDを支援して下さる拠点がありますが、ここ3年程で盛り上がってきた地域が甲奴郡上下町です。レターでもしばしばご紹介した庄原市の皆さんには1期生のときからお世話になっていましたが、ここで出会った安原定子さんが校長先生として上下町立矢野小学校に転任され、その学校を研修生がお訪ねしたのが始まりです。今、この町でPHDを広めて下さっている中心人物が、福崎裕夫さんと桑本昌和さんのお二人。福崎さんは34才にして町会議員、桑本さんはフィリピンに行ったこともあり現在は、塾の先生をしておられます。お二人とも、今の若い人に対する教育の情熱がPHDにつながるもののように感じます。西日本研修旅行のコースとしてお寄りするだけでなく、昨年夏には短期間ながら農業研修を手配していただきました。

その後上下町の教育長になられた安原さんともいい連携で、地元の学校に研修生が訪ね、また老人養護施設でも交流がありました。むろん桑本さんの塾では研修生はスペシャル講師、平生から近隣に住む外国の方との交わり、差別解消のためのとりくみ、核廃棄物問題などの社会問題に対しても敏感です。日常の社会に対する問題意識のひとつとしてPHDを位置づけて下さっているように感じます。次はこの町から研修生の村を訪ねる人をだして下さい。お願いします。



淡路島ウエストコーストの仕掛人
兵庫県五色町 勢造博之さん

3人にのぼるインドネシアからの漁業研修の実施から、町長さん・指導家庭の方々によるスマトラ訪問、農業研修生の受入れ、更に発展して昨年秋にスマトラの伝統音楽・舞踊のグループ「インドジャティ」が町の文化祭に出演するまでに至り、あの鶴見良行氏をして「いいねえ」と言わしめた五色町の動きはまさに草の根交流のモデルケースともいえるのではないのでしょうか。それは当然多くの方の理解と支援あってのものですが、その中であえておひとりご紹介となれば勢造博之さんになるでしょう。

町役場にお勤めの2人の持ち、豪快そうにみえる外見に比して繊細な神経の持ち主らしく、スマトラにも2度でかけてもらっていますが、向こうでは食べ物が合わなく、小さくみえたとは同行者の話。

研修生が何う前の受入先との交流から実際にお世話になる時も同行していただき五色町の中はもちろん、周辺の町へもいろいろと声をかけ、PHDの思いを広めて下さっています。町の行事のいくつかにPHDが関われるのは大変嬉しいことです。

何が勢造さんを駆りたてるのか一本人の確認を得ていませんので何ですが、「若い女性ボランティア及び職員」が時々五色町を訪れることにありそうですが真実でなければお許し下さい。



PHD事務所に出入りする人の中で三河さんは古参メンバーのおひとりです。PHDを知った当時は精神薄弱者の授産施設の職員でしたが、かねてから暖めていた構想を具体化させ、この4月に自らが所長として心身障害者通訓練所「しゃろうむ」をスタートさせました。ご自分も障害がありますが、これまで来日した研修生の良き相談相手、遊び友達としてかわり、特にインドネシアの研修生と仲良くなり、現地にも出かけています。

しゃろうむの訓練生のプログラムの準備をすすめる途中、PHDにもちこまれたタイの布のことが三河さんの耳に入り、布を使った作業を、プログラムに取り入れることになりました。第一弾はポプリの入ったお袋、しゃろうむのボランティアの方がタイの布で小袋を作り、訓練生がポプリをつめます。アジアの村の自立と日本の障害者の自立がPHDでドッキング。新聞にもとりあげられました。アジアに学んで、国内の課題に目をむける、まさにPHDの願いのひとつが、しゃろうむで始まっています。2つの事務所をかけたもちで応援する人もいます。スタートまもなく、訓練生の数が予定より少なく経営面で三河さんの苦勞も多いようですが、三河さんの情熱が周囲の人々の支援をおこしています。しかしながら奥さん候補がいまだでいていないようなのでそのへんもよろしく。

しゃろうむ連絡先 〒652 神戸市兵庫区湊川町9-14-6 078-511-6120

まだまだご登場願うべき方々が沢山居られますがまたの機会に。

フィリピンレポート

C.O.って何だろう

C.O. (Community Organizing)、日本語に直訳すると地域組織化。我々日本人にとってはなじみの薄い言葉ですが、アジアを始めとする第三世界の中で全体の三分の二以上を占めている農村地域において、貧困と搾取(経済的・権力的抑圧)の下におかれている人々が、自助努力によって解放を図る正義の闘いといえます。今回、3月末に7期生が比較研修を行ったフィリピンの農村での SAFURUDI (Social Action Foundation for Rural & Urban Development Inc.) の活動を例にC.O.についてお話したいと思います。C.O.にはいくつかのステップがあります。外部のオーガナイザー(組織者)、あるいはPHD研修生(地域)に助けを求めながら健康、政治、経済、文化といった分野で、その村(地域)に融合していきながら問題を抱えているのかを調査分析します。なぜかのような状況にありいかなる問題を抱えているのかを調査分析します。なぜか。次にこうした情報を劇や漫画、ポスター、壁新聞などを用いて伝え、村の人々一生懸命動いても貧しい状態が続くのか、病気になる人が多いのはどうしてなのか。次にこうした情報を劇や漫画、ポスター、壁新聞などを用いて伝え、村の人々自分達のおかれている立場を認識しています。こうした構造的な状況の把握が自分達自身の手による変革の動機づけとなります。そして、地域の人々を中心として村になり様々な活動が始まります。今回研修を行ったガバルドン村でも後述するレポートで紹介したような活動が進行中です。SAFURUDI のスタッフとして村に住んでいるリンダさんによれば、'82年に村にはいって現時点でのC.O.の達成率は50%であらう。最終的な目標はあくまで地域の人々自身の自助努力によって(自主的、自立的に)組織化を果たし、新しい制度、価値、関係を創造していくことにあるということでした。PHDとしては、研修生にC.O.の現場での体験から1. 村の人々と共に働くという態度、2. 村の人々が自覚成長し団結していくという過程、3. 組織(グループ)を作っていくことの大切さを学んでもらいたいと考えています。一方的な援助という慈善の姿勢ではなく、地域の人々と連帯し分かち合っていく姿勢が大切です。

フィリピン農村での地域組織化の現場を体験したトニーさん、サンコムさん、ドミーさん

7期生3名は、1年間の日本でのプログラムを終えた3月下旬、フィリピンで10日間の最後の研修を行いました。場所はルソン島中部のヌエバエシーハ州ガバルドン村。この海外研修のねらいは、アジアの農村で、C.O.の実践を現場の中で体験すること、そしてこの経験を研修生が各々の村(地域)に帰ってからリーダーとして活動していく上での参考にするというものです。マニラからガバルドン村へバス、ジブニーを乗り継いで5時間の行程。四方を山に囲まれたのどかな農村にみえましたが、その山は木をとりつくし、雨期には洪水で田畑に大きな被害がでることもたびたびです。また日本からの農業、化学肥料も目に付きます。このガバルドン村のリーダーの家にホームステイをし、その実践から学びました。SAFURUDIスタッフのリンダさんは医者として村で働きます。村の子供たち、青年たち、女性たち、お百姓さんと様々な人々に組織化を働きかけて'82年以来活動を続けています。子供たち、青年たちには奨学金制度や伝統文化を守っていく活動を通じて将来、リーダーとなるべき人材を育成する活動をしています。



藤製品、薬草を前にガバルドン村のスタッフ・リーダーからC.O.について説明を受けるドミーさん、トニーさん、サンコムさん

女性たちは、村の周辺でとれる薬草を用い保健衛生の知識を普及したり、籐やシーグラスと呼ばれる葦類の植物を採集加工して家具を作りこれを販売するといった経済活動を行っています。豪快に笑い、よくしゃべる働き者の女性たちは、この村の中心的存在です。お百姓さんのグループは、始まったばかりで、農業、化学肥料に頼らない伝統的品種を見直し、有機農業による生産物をグループで販売し、農業協同組合を形作っていくと模索中です。PHDの研修生たちの話にも、熱心に耳を傾け、特に農業の技術には大変興味を示し、ガバルドン村の人がネグロスにドミーの村を訪ね、土壌改良の学習をすることになりました。この新たな交流の始まりはPHDにとっては望外の喜びといえます。お百姓さんたちかというのを上げたら、この村全体が変わり始めるのではないかと気がしました。こうした村にあるもの、人、文化、伝統を護りながらじっくり腰をすえて活動し、村の人々自身が変わっていく、日本での研修と併せ、この経験がドミー、トニー、サンコムとの帰国後の活動に大きな影響を与えるように思いました。

(主事補 中尾卓英)



フィリピンスタディツアー報告

89年3月に欧州の開発教育の現場を訪ねて得たヒントから「第1回ジャーナリストのためのスタディツアー」を実施しました。実際にはジャーナリストの参加は少なくなりましたが、充実したツアーになりました。

旅程

- 3/24-26 マニラ
ストリートチルドレンの実態
スモーカーマウンテン見学
- 26-30 ネグロス
砂糖農園、国内難民の様子
研修生の村
- 31-4/2 セブ
外国人向観光地

ガバルドン村の川への道の作業にむかう途中、カラバオにまたがった少年に出会った。背後の山には殆ど木がない。雨期にはまわりの田畑は水につかってしまうことだった。

出会い、反省、トクソウシン、勉強

「闘争心が私達の勉強することへの意欲をかきたてるのです。」この言葉は、ある村で人々と農地改革について話している時、一人の青年が発した言葉である。その青年は、小学校しか卒業していない。「闘争心」今まで意識したこともなかった言葉だった。このツアーでストリートチルドレン、スモーカーマウンテン、アーバンブーアの人々、ネグロスの村々を訪ねて、とてもじゃないけど私なら生きていけそうもない場所で必死にそれでも真剣に生きている人々と出会い、これまでの自分の行動や考え方の甘さを反省すると同時に私自身の中にも闘争心を見出し、勉強することの必要性を痛感させられたツアーだった。

中山瑞恵(神戸市・短大2年)

「目からウロコ」の旅でした。

私の住んでいる公団住宅では、毎週のようにどこかで引っ越しをしている。自治会はなく、階段の清掃をする人もなく、荒ゴミ置き場も年中ふれかえっている。それでも自治会をつくらうという動きはない。大半の住人が「住みかえるまでの一時しのぎに」と考えているのだ。

ツアーの間、コミュニティなき我が団地のことを何度もわたしは思い浮かべていた。フィリピンで見聞きする暮らしと引き比べて余りにも違いが大きかったからだ。

例えば、20年近くも住んでいる土地から追い立てをくっている人達がいた。「スラムはこわくない」とアキノ政権が約束していたのにもかかわらず。そこに住む50余家族は、立ち退き要求に抵抗することにした。「連中が来たら、子供達を先頭にして住民みんなで入り口をふさぐつもり。」先頭に立つのは、白髪の目立つサラさん。自分達の街は、自分達で守るというわけだ。



スモーカーマウンテンでゴミを拾い生活する人々

ピンからキリまでみたフィリピン

生活におずびつけることのおずがしさ

今回のツアーに参加してフィリピンという言葉にとっても敏感になりました。日本向のエビ、緑のない山、外国人向の観光地、大地主のぜい沢な暮らし、何もかもしばられて生活する貧しい農民、そしてその困難に立ちむかう人達を見たからです。見ることも大切ですが、帰ってそれをみんなに伝え、今の自分の生活におずびつけることのおずがしさを、学校で2回、報告会をすることで感じました。帰ってきてどうするのかスタディツアーの本当の意味だと思えるようになりました。

丸橋寿美代(広島市・専門学校2年)

サトウキビ農園で会ったのは、4代前からそこに住んでいる労働者達。給料は、法定の最低賃金にさえ及ばず、学校も途中でやめざるを得ない。しかも日照りのせいで、週3日も仕事があればいいほうだという。だが、そんなしんどい環境にあっても、彼らはあきらめていない。自ら労働組合を組織して農園主と粘り強く交渉を続けているのだ。「闘争がわれわれを鍛えてくれた」と話す彼らの目は、押し黙ったまま満員電車のつり輪につかまっている日本のオトサンたちの目とずいぶん違って見えた。

そのほかツアーでは、有機農業や協同組合づくりに取り組むKASAMA(南ネグロス小農協)のPHD研修生のドミーさんやネストールさんを送り出した母体)をはじめ、いろいろな活動をする人達に会って話を聞くことができた。

中村正夫
(神戸市・フリージャーナリスト)

亀田正己(尼崎市・保育園園長・牧師)

新企画 私もちよつと世界を斬る!

今号から始ったこの企画、私たちがとりまく世界の様子をPHDの仲間がそれぞれの見方で綴ります。投稿お待ちしています。

「六甲を歩いて思ったこと」

赤松恵美子 西宮市・主婦

六甲越えをして、有馬へ下った。新緑の中を木の花、鳥の声を愛でながら久々の森林浴を楽しんだ。その六甲山が明治中頃には禿山だったと生協の広報誌で知った時は、一瞬目を疑ったものだった。近年世界各地で環境保護が叫ばれるようになって来た。「私達も身近なところから環境を考えるグループを作らない?」と友人が「地球環境報告」(岩波新書)という本を貸して下った。読み進むにつれて血が凍りそうな衝撃を覚えた。人類は有史以前から地球の砂漠化に手を貸して来たというが、ここまで環境を破壊した責任は、先進諸国の自然に対する傲慢さにあると思う。この過ちに気づいた今、その償いとして、その頭脳と良識を結集して地球を守るために最大の努力を払う義務もあるはずだ。六甲の緑を甦らせたように日本は世界の環境破壊を食い止める役を果たさねばなるまい。まずは私も親から受けついで「勿体ない精神」を、子や子孫に伝えてゆきたい。

PHDのWINK デビュー!

期待の新人といったら月並みですが、4月から2人の新しい女性が囑託職員として加わりました。



編集部(以下編) まずは自己紹介を。ヒロミ(以下ヒ) 逸見広心です。といっても正確に読んでもらえないと思いきやヘンミヒロミとフリガナです。3月に神戸大学農学部畜産学科をてた岡山市出身、22才、占いで24で結婚です。マユミ(以下マ) 加藤麻由美と申します。東京は下落合からきました。関西ははじめてで、関西弁習得に励む毎日です。上智の文学部仏文科を卒業した22才。同じく出会いを待つ私です。編 逸見さんは学生の時からPHDに出入りしているプログラムに参加してくれたのですが、仕事としてやろうと思ったのは?

ヒ 普通の会社に入って、歯車のひとつとして働くみたいな感じのところより、いろんな人に出会えるここがと思い、またPHDの「ともに生きる」というのに共感しますから。編 加藤さんがはるばる来られた訳は? マ 子供の頃から岩村先生の働きを知っていたのと、大学でR.アビト先生からPHDのことをきいていて、訪問させてもらったときに、国内に現場があって泥くさそうなところにひかれました。編 そして今や草地賢一総理事とカトちゃんケンちゃんというコンビを組むに至ったのです。マ (無言) 編 抱負をおきかせ下さい。ヒ 研修生と一緒に農業を学びたい、それと各地にそれぞれのPHDが広がるような役割を何か果たせたらと思います。マ 学生の時、フィリピンに行き、むこうの大変な状況に触れたんですけど、日本に住んでいて、そこで何ができるのかをPHDの中でみつけていきたいです。それぞれ専門を生かし、逸見さんは研修、加藤さんは、海外とのやりとりを、加えて広報、プログラム運営を両者担当します。鍛えて下さい。

PHD NEWS

〈会費・ご寄附寄託状況〉
1990年 2月 143件 2,077,704円
3月 110件 2,702,203円
4月 466件 3,399,157円
計719件 8,179,064円

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴致しました。ご協力いただき深く感謝申し上げます。

〈新理事に津田貞之氏就任〉
5月17日開催の第23回理事会において、河原三郎理事が退任され、新たに津田貞之氏が就任しました。他10名の役員は重任となりました。

〈売上げ目標1千枚!?〉
夏も本番です。Tシャツの出番です。PHDオリジナルTシャツはお元気ですか。今年も90年度版Tシャツをつくりました。PHDのシンボルの2人の女の子をイラストにし、10地域の言葉で「生きることは分かち合うこと」をプリント。値段の方は従来通り、運動協力費込みで2000円(子供用1500円)。もうお持ちの方もそうでない方も、みんなでこの夏をsharing!

〈まだまだ第2回ジャーナリストのための第三世界ツアー〉
3月の第一弾に続き、8月にタイ、バングラデシュ、ネパールのNGOを訪ねるジャーナリストを対象とした旅を予定。期間 90年8月1日~14日
定員 5名
費用 39.5万円

〈ごめんスマトラ・ツアーはほぼ満席〉
前号でご案内の夏のインドネシア・スタディーツアーは問合せが多く、原稿締切時でほぼ一杯。次は暮れのタイツアーです。希望者はお早目にお問合せを。

〈夏は草の根生活塾に行くしかないぞ〉
今年も草の根生活塾の季節がやってきました。川から水をくみ、カマドで御飯をつくり、お風呂はゴエモン風呂。丹波の自然の中でPHD研修生と一緒にアジア・南太平洋のことを学び、農家に泊り、農業を体験して、町の生活をふり返ってみましょう。研修生がつくる料理、地元の皆さんとの交流も楽しみ。日程は下記の通りです。詳しいご案内、申込書はお早目にご請求下さい。日程: 90年7月25日(休)~29日(日)4泊5日
場所: 兵庫県篠山町たんば農文塾及び協力農家
参加費: 子供¥18000
大人¥20000(会員は割引有)
対象: 小学生高学年以上
募集定員: 15名(定員になり次第締切)
併せてリーダーの役のお兄サン、お姉サンを大募集! 詳しくは協会へ問われたし。

〈研修生ホームステイをお願いします〉
記事の中でもご紹介したインドネシアからの6人目の研修生、サムスアリスさんが8月に来日を予定しており、5~6週間の日本語研修期間の滞在先を探しています。神戸、三宮の学校に通学可能な範囲で、お引受けいただける方、お願いいただけるお知り合いをご存知の方、ご一報お待ちしております。

〈第14回水俣実践学校のご案内〉
研修生が毎年御世話になる相思社より夏のプログラムの案内が届いています。テーマ: 「埋め立てられない水俣病」
期日: 8月3日~9日
参加費: 25000円 定員: 30名
お問合せ先: 〒867 水俣市袋34
財)水俣病センター相思社
実践学校担当、弘津さん
電話0966-63-5800

○月×日のPHD協会
総理事・草地 2泊3日で長崎出張。ウエスレアン短大の講義。インドネシア出張の記事が神戸新聞、本人の執筆記事が朝日新聞に掲載され、いいPRとご機嫌。時折、腰痛を訴え、年を感じます。

主事・藤野 申請に時間のかかった寄付に対して免税措置を受けられる「特定公益増進法人」の認定通知をお役所から受け、ホッと一息。最近ボランティアの若い女衆との食事の機会がないとうるさい。

主事補・中尾 8期1班研修生のビザが仲々おらず、ヤキモキするうちに、休日にサッカーの試合でビザを打ち、内出血で病院通い。フィリピン研修の評価を相手に送るため、英文とニラメッコ。

囑託・加藤 神戸での生活も徐々になれ、何やら大物の風格。一部には昨年の研修生トニーさんに似ているとの声も。布展示会の打ち上げを彼女宅でタイ料理を囲み、若いメンバーが集まりワイワイ。

囑託・逸見 神戸の百貨店での布展示会には連日店頭立ちPR。名古屋にも日帰り出張。先週は鳥取の交流会に出向き、仕事として初めて、人前で話しをし大緊張。

舞子中学校生徒会の3人が使用済切手を届けに来訪。文化発表の相談も。

小野市立河合中学校の永井先生が道徳の授業教材にと映画「世界の屋根のヒゲドクター」を借りに来訪。

昨年の夏のインドネシア・ツアーメンバーが集り、レポート作成会。はるばる伊豆の山本先生(研修指導者)も九州出張の帰りに寄られる。

古参メンバー大森さん来訪。夏の草生塾に自転車で参加の由。60才。相変わらず元気。

89タイツアー参加者、西村嬢が友人田中さんを伴ってゼミ発表の資料集めて来訪。草生塾のリーダーにと強く強く勧誘。

カレンのムシキークの女性達が織った草木染の布を持ち帰って5ヶ月が過ぎました。布の評判は上々で、PRをしている私達「カレンの布支援グループソディー」の活動にも力が入ります。

大きかった日本での反響

プリチャーさんから渡された布は全部で175枚、ツアー参加者にはたいそうな量に思えました。ところが3月に入る頃には底をつき、100枚追加で送ってもらった分も現在残っていません。お待ちの方すみません。「クツションやのれん、バック、帯といろいろなものが作れますよ」と、見本用にソディーのメンバー中山とし子さん、竹垣真佐美さん(いずれも主婦)が加工してみました。布を通じて日本とタイの農村の女性が交流しているという記事がいくつかの新聞、雑誌に

掲載されたことから、県内だけでなく県外からも多くの問い合わせ、注文がありました。これまでPHDに関わりのなかった方が布をきっかけに関心を寄せて下さり、「息長く続けていきましょう」とのお便りも届いています。近所のバザー



だけでなく、神戸そごう、名古屋丸染の両百貨店でもタイフェアの催しに出展しました。神戸では学生、主婦の方が売り子として手伝って下さり、名古屋でも会員の服部トシ子さん、豊島璋子さんが駆けつけて下さいました。また浦安の住田さんが西友浦安店での催して販売して下さいました。

タイからの便り

5月26日、プリチャーさんと布の織り手のひとりベリポーさんから手紙が届きました。プリチャーさんは、布の代金を受取り織った人達に渡したと、別の村でも新しいグループが誕生し、糸にする綿の種を播いたので来年はたくさんできそうだと知らせてくれました。ベリポーさんからは、雨期に入り農業で忙しいけれどより良質の布を織りたいとありました。次に布が届くのは、農閑期になる冬ごろになりそうです。このほどカタログを作りましたので、ご希望の皆様にお届けしたいと思います。ソディーのマークを浜松市の太澤さんがデザインしてくれました。活動はまだ始まったばかり。夢や希望いっぱいソディー(カレン語で「卵」)です。多くの人たちの参加をいただき、みんなで育んでいきたい思います。

1号担当 藤岡佐知(姫路市・生協勤務)



編集後記

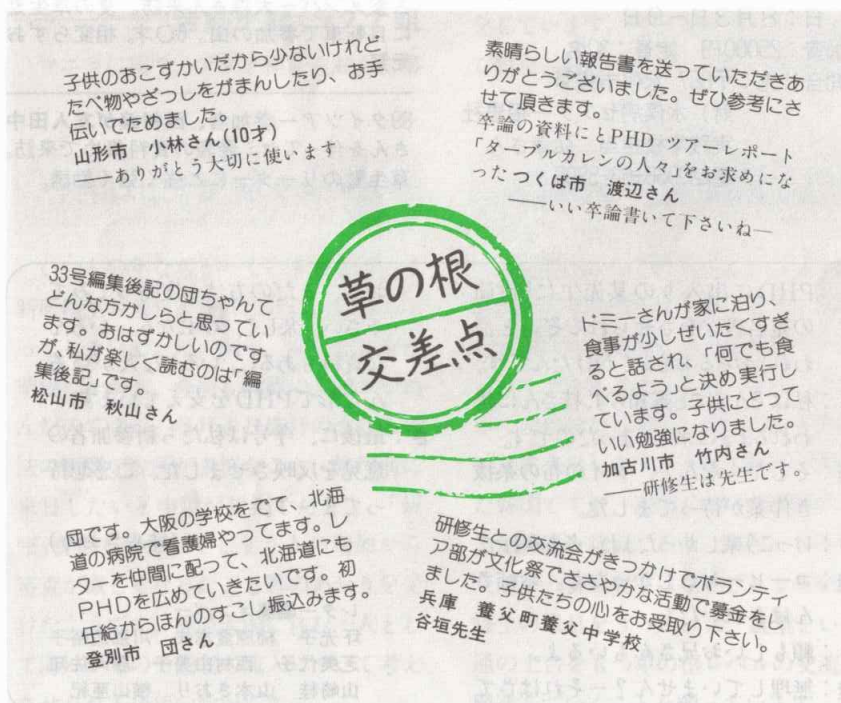
桂: こんにちは。(夜読む人はこんばんは)はじめまして。
さおり: この春めでたく大学生になり、PHDに出没するようになりました2人組です。
桂: PHDに来るようになったのは昨年高校3年の時に中尾先生(現職員)のお話を聞いてなんですが、連絡先を高校に尋ねに行ったら、

PHDに出入りの某先生に「封筒の宛名書きをさせられるぞ。」と言われ、おそろおそろでかけたんです。
さ: 私はそんなこと露知らず桂さんに誘われるままに来てしまったのです。
桂: そしたらなんと、タイの布の糸抜き作業が待ってました。
さ: けっこう楽しかったよ。糸まみれて。
桂: コーヒーおいしかったし。お姉さんはきれいだし。
さ: 頼もしいお兄さんもいるよ。
桂: 無理していません?ーそれはさて

おき、まだの方は一度寄ってみて下さい。楽しく、タメになる。いろんな資料もあるし、いろんな人がいろんな形でPHDを支えています。
さ: 最後に、今号は私たち新参加者の意見を反映させました、ご感想待ってま〜。
(桂&さおり)

レター編集メンバー
環光子 柿原登志夫 川那辺裕子
芝美代子 西村由美子 藤岡佐知
山崎桂 山本さおり 横山亜紀

新規会員・寄付者ご芳名は、 個人情報保護のため 掲載しておりません。



ご寄附に対する免税の特典

当法人は特定公益増進法人としての認定を得ていま
すので、ご寄附に対する下記のような特典があります。

寄附者が個人の場合

寄附金合計額(所得金額の25%未満)マイナス1万円
寄附金控除額(所得総額から控除できる額となります)
(例)1000万円の所得の人が250万円を寄附されると、
249万円の寄附金控除。

寄附者が法人の場合

寄附金合計額が一般寄附損金算入限度額の2倍未
満までが損金扱いとなります。
(例)資本金10億円で、その年の所得が3億円で1年決算の会社の
寄附金の損金算入額は1,000万円未満まで(一般では500万円)

ロータスクーポン・グリーンスタンプ・ブルーチップ

1990年2月16日～5月21日

〈大阪府〉 〈兵庫県〉
榎本桂子 白浜小学校地域教育部 蓬萊村子
養父町立養父中学校 三木美保

